

市原市二日市場廃寺跡確認調査報告



千葉県

序 文

千葉県下には、国分寺跡をはじめ40数か所にのぼる古代寺院跡の所在が確認されています。これらの寺院跡は、奈良、平安時代における地域の歴史、文化を解明する上で重要な遺跡であります。発掘調査によりその内容を把握できた例は数少ない状況です。

千葉県教育委員会では、県内に所在する古代寺院跡の中で、特に重要性が高くかつ開発の影響を受ける恐れのあるものについて、規模、時代等を明らかにして、その保存策を講ずる資料とする目的で、国庫補助事業として昭和55年度から確認調査を実施してきました。

今年度は、市原市二日市場に所在する二日市場廃寺跡の調査を実施しました。当廃寺跡からは、以前に鑑瓦(雷文縁八葉複弁蓮華文、内傾三重圏文縁十二葉単弁蓮華文)、宇瓦(三重弧文)、女瓦、男瓦等が発見されており、その中でも雷文縁八葉複弁蓮華文鑑瓦は、いわゆる大和紀寺式に属するもので、ごく限られた地域にしか分布しない特異な文様構成をもつものとして注目されてきました。今回の調査では、基壇跡は確認されませんでした。掘立柱跡が多く検出され規模や時代を把握することができました。この成果によって、重要な資料と課題を提供し得るものと考えております。

このたび、その発掘調査の成果が調査概報として刊行される運びとなりました。この報告書が学術的資料としてはもとより、文化財の保護、活用のために広く一般の方々にも利用されることを期待しております。

終わりに、調査に当たって、多大な御協力をいただいた市原市教育委員会と土地所有者の皆様をはじめとする地元の方々、調査を担当された財団法人千葉県文化財センターの職員の方々の御苦勞に対し、心から感謝を表します。

昭和59年3月31日

千葉県教育庁文化課長

齋 藤 浩

凡 例

1. 本書は、千葉県教育委員会が実施した古代寺院跡確認調査の第4年次の報告である。
 2. 二日市場廃寺跡は、千葉縣市原市二日市場機織面572-1番地他に所在する。
 3. 調査は、国庫補助金を得て、千葉県教育委員会が千葉県文化財センターに委託して実施した。
 4. 調査は、昭和58年11月7日から12月10日にかけて実施した。
 5. 現地における調査は天野努と永沼律朗が担当したが、阪田正一、郷堀英司の助力を得るところが大きかった。また、整理作業は、天野努の指導・助言のもとに郷堀英司が担当した。
 6. 調査の実施にあたっては、市原市教育委員会から多大な御協力を得るとともに、二日市場地区の下記の方々からは所有地を借用させていただき、また、多大の御援助をたまわった。記して感謝の意を表するものです。
- 野口和三郎・布施之康・吉野 宣・芳野三郎・吉野武男
7. 発掘調査や本書をまとめるにあたって、下記の方々より種々の御教示、御高配をたまわった。

須田 勉・宮本敬一・田中清美・今泉 潔

目 次

I. はじめに	(阪田)	1
II. 調査の経過と方法	(郷堀)	4
III. 検出遺構	(郷堀)	6
IV. 出土遺物	(郷堀)	15
V. ま と め	(天野・阪田・郷堀)	24

挿 図 目 次

第1図	二日市場廃寺跡の位置と周辺の古代寺院跡分布図 (1/50,000)	2
第2図	小グリッド設定図	4
第3図	周辺地形およびグリッド設定図(1/5,000)	5
第4図	標準土層 (1/40)	6
第5図	トレンチ配置図 (1/1,000)	7
第6図	A地区検出遺構平面図(1/200)	9
第7図	溝A-A' セクション図(1/40)	9
第8図	B地区検出遺構平面図(1/200)	11
第9図	溝B-B' セクション図(1/40)	11
第10図	溝C-C' セクション図(1/40)	11
第11図	軒丸瓦A類(1~4), B類(5,6), C類(7) (1/4)	28
第12図	軒平瓦, 重弧文A類(1,2), B類(3), C類(4) 唐草文A類(5), B類(6) (1/4)	29
第13図	行基式丸瓦(1,2) (1/4)	30
第14図	玉縁式丸瓦A類(1,2), B類(3,4) (1/4)	31
第15図	平瓦格子系A類(1,2), B類(3,4) (1/4)	32
第16図	平瓦格子系C類(1,2), D類(3,4) (1/4)	33
第17図	平瓦縄目系A類(1), B類(2,3), C類(4) (1/4)	34
第18図	平瓦X類(1), Y類(2,3), 道具瓦(4~7) (1/4)	35
第19図	道具瓦(1,2), 土器(3~8), 鉄釘(9), 鉄滓(10,11) (1/4)	36

表 目 次

第1表	軒丸瓦計測値表	16
第2表	丸瓦, 平瓦出土比率	21
第3表	丸瓦分類別出土比率	21
第4表	平瓦分類別出土比率	21
第5表	平瓦格子系叩き分類別出土比率	21
第6表	平瓦繩目系叩き分類別出土比率	21

大 目 図 軒 図 版 目 次

図版1 空からみた二日市場	図版6	1	軒平瓦重孤文C類
図版2 1. 遠景(南より)	2	軒平瓦唐草文A類	
2. 発掘風景(南東より)	3	平瓦格子系A類	
3. 発掘区(南より)	4	平瓦格子系B類	
図版3 1. C4-35, 36検出掘立柱建物跡	図版7	1	平瓦格子系C類
2. B4-36, P1瓦出土状況	2	平瓦繩目系A類	
3. C4-24, P2瓦出土状況	3	平瓦繩目系C類	
図版4 1・2・3・4 軒丸瓦A類	図版8	1	平瓦Y類
図版5 1・2 軒丸瓦B類	2	玉縁式丸瓦B類	
3 軒丸瓦C類	3	高坏	
4 軒平瓦重孤文A類	4・5	坏	
5 軒平瓦重孤文B類			

I. はじめに

1. 遺跡の位置と環境

二日市場廃寺跡は、市原市二日市場 551 他に所在し、字名には釜田、橋本、三反田、山王台、熊野越、機械（織）面、本郷、天古宮缺ノ土などがある。

市原市は千葉県の中央南寄りに位置しており、南北に細長い市域を呈している。南は清澄山系、北は東京湾に接しており、県内においても広大な面積と自然環境を有している地域である。

市のほぼ中央部には清澄山系に水源を發した養老川が著しい蛇行を呈して流れている。河口附近において流れを北から北西に変えて、広範な沖積地を形成して東京湾に流入している。この地域には養老川の旧河道が各所に認められ、往時における養老川の流路が窺知できる。一方、北西に流れを変える直前まで養老川は標高約 60~70m の洪積台地が対峙する中を蛇行しながら北への流れを呈しており、中央の洪積地には養老川による曲流短絡地形が島状の微高地を形成するという地形的な特徴を呈している。二日市場廃寺跡はこの島状の微高地上に位置している。

遺跡は、小湊鉄道上総山田駅から南方約 1 km の地点に位置している。標高約 15m で現水田面からの比高差は約 3.5 m を測る。微高地は約 10.4ha で北辺部分は緩斜面を呈して水田面に続く地形であるのに対し、南辺部分は急斜面を呈する地形を呈している。これは嘗て養老川が、現在の土宇橋附近から流れを北東に変えて二日市場の微高地を袋状に曲流していた時点の所産である。現在は宝永年間において二日市場と馬立の境をなす小河川を利用して掘り切り直線的に流れる流路となっている。したがって、古代、中世においては二日市場の地域は養老川左岸に位置し、安須、高坂、上高根等の地域と有機的關係を有していたと考えられる。

養老川流域は自然環境に恵まれているため、各時代の遺跡が所在するところであるが、とりわけ古墳への分布に注目できる。古墳の分布は関東地方南部における顕著な地域であり、河口近くの西岸には大塚古墳、二子塚古墳が位置する姉ヶ崎古墳群が、また東岸には持塚古墳、神門 A 古墳が位置する市原古墳群があり、古代における重要な地点として注目できる地域である。

さて、遺跡周辺における歴史的な環境を瞥見すれば、下流域のような華やかさはないものやはり古墳の分布が認められる。養老川左岸安須の台地縁辺には安須古墳群、光風台には団地造成時に未調査のまま削平された墳丘長約 60m で、5 世紀後半から 6 世紀にかけた頃の築造と考えられている前方後円墳 1 基を含む中高根古墳群、風戸の台地縁辺には白幡台古墳群、そして、養老川水系と小櫃川水系の分水嶺にあたる馬場台の台地には上高根古墳群が位置している。一方、右岸の堀ノ内の台地には大城台古墳群、松崎の台地には松崎古墳群をはじめ 4 支に区分できる古墳群がある。そして、武士の台地には武士古墳群が位置している。これらの古墳群はいずれも養老川の沖積地を媒介として成立したものであることはいうまでもないであろうが、養老川



第1図 二日市場廃寺跡の位置と周辺の古代寺院跡分布図 (1/50,000, 姉崎)

を挟んで対峙する両古墳群の規模や群内における古墳群被葬者の階層的隔差などについて今後究明しなくてはならない課題であろう。

寺院跡は、下流域右岸に上総国分寺、そして国分寺台下の沖積地には上総国府の推定地が位置している。国府推定地に近い左岸には今富廃寺跡が位置している。中流域右岸には先に述べた武士古墳群に近接して武士廃寺がある。また、二日市場より南方約4 kmには小櫃川水系の松川に面した右岸の台地上に川原井廃寺跡、対岸に萩ノ原廃寺跡が位置しており、二日市場廃寺跡を含めて当諸地域における古代寺院跡の特異性が窺える。

2. 研究略史

房総における古代寺院跡の調査研究は古く、明治36年の山崎春凌著「国分寺の古刹一下総」『風俗画報』¹⁾に遡り、今日まで連綿とした調査研究が行なわれているところである。

昭和7年に印旛郡栄町に位置する龍角寺の本尊である銅造薬師如来坐像の首部が、奈良時代前期における白鳳仏の様式を有していることが判り、東京都調布市深大寺の銅造釈迦如来倚像とともに関東地方における白鳳仏として一躍著名になった。

この白鳳仏の発見を契機として古代寺院跡の調査研究が盛行を見るに至り、次第に房総における仏教文化の実像が把握されることとなった。また、古瓦出土地が古代寺院跡を理解する上で基礎的な役割を有しているところから分布調査も行われているところである。現在113か所が房総風土記の丘博物館によってまとめられているが、これらの中には瓦窯跡、あるいは集落遺跡も含まれているため、寺院跡のみを限定して考えるならばその数は今少し減少するであろう。

さて、二日市場において古瓦が出土するということが学界に報告されたのは、昭和53年12月発行の『古代』64掲載の須田勉著「房総の古瓦に関する覚書(1)」が初見である。発見の経緯については『古代』に詳しいが、実際には昭和51年には識者の目に触れているところである。昭和53年9月発行の『千葉県埋蔵文化財包蔵地等一覧』には二日市場大光院廃寺址として記載されている。

出土した古瓦は、花(雷)文縁八葉複弁蓮華文軒丸瓦、三重圏文縁十二葉単弁蓮華文軒丸瓦、三重弧文軒平瓦、格子目印文の平瓦、丸瓦などがあり、この内花(雷)文縁八葉複弁蓮華文軒丸瓦は大和紀寺式に属する軒丸瓦として県内において初見となった資料であるとともに白鳳期の寺院として二日市場廃寺跡が位置づけられるところとなった。一方、千葉県教育委員会によって重要遺跡確認調査の一環として発掘調査された山武郡成東町に所在する真行寺廃寺から瓦積基壇の建物跡二字とともに花(雷)文縁八葉複弁蓮華文軒丸瓦が出土するにおよび、二日市場廃寺跡が再び注目されることとなった。

昭和54年3月発行の『古代』65に二日市場廃寺に近く位置する川原井廃寺跡出土の古瓦が報告され、出土した平瓦、丸瓦の中には二日市場廃寺出土の古瓦と共通した特徴を有していることがわかり、当地域での古代寺院跡の重要性が指摘されるに至ったのである。

II. 調査の経過と方法

1. 調査の経過

今回の調査は昭和58年11月7日から12月10日までの、実働28日間に亘って実施した。

当遺跡の所在する二日市場の集落は宅地化が進行しており、発掘が可能となる地点は限られてしまったが、従来から瓦が多く散布することで知られる範囲の中で、最も広い面積を調査することができる2地点を選定した。なお、この2地点については、西側の地区をA地区、東側の地区をB地区と仮称した。

調査区の現状は畑地となっており、耕作物の収穫後に発掘に着手することとなった。

地形測量および基準点測量は測量業者に委託し、調査に先立って行った。11月7日に発掘器材の搬入および杭打ちを行いトレンチを設定した。翌日、B地区から発掘調査を開始した。11月25日からはA地区に移動し調査を続行した。この間に遺構検出後、写真撮影、実測と順次進め、12月6日より埋戻しを開始し、12月10日、発掘器材の徹収をもって今回の確認調査を終了した。

調査面積はA地区292㎡、B地区508㎡の合計800㎡となった。その結果、多数の掘立柱建物跡、溝状遺構、土壌などを検出した。

なお整理作業は発掘終了後から、翌59年1月中旬にかけて水洗、注記と接合作業を行い、2月中旬迄に、報告書作成のための瓦の分類を行った。年度末の限られた時間の中での作業のため、不十分な形でしか分類作業を行えなかったことはいなめない。

2. 調査の方法

発掘にあたっては国土方眼座標（第9座標系、 $X = -61,600$ 、 $Y = +26,300$ ）を基点におき南北にX軸、東西にY軸として100m方眼を設定して大グリッドとした。X軸は基点から南へ順次1・2・3…、Y軸は東へ順次A・B・C…と付した。さらに大グリッドを100等分し、10m四方の小グリッドに分割して、第2図のように番号を付した。グリッドの呼称は大小のグリッドを組み合わせ、B4-10、C

00	01	02	03	04	05	06	07	08	09
10									
20									
30									
40									
50									
60									
70									
80									
90									

第2図 小グリッド設定図



第3図 周辺地形およびグリッド設定図 (1/5,000)

4-99のように付した。調査においては2m巾のトレンチを基本とし、取上げた遺物はトレンチの位置するグリッド名を使用した。また遺構については、その全容を確認し得たものがないため調査時には遺構番号をつけず、検出したグリッド名を使用した。

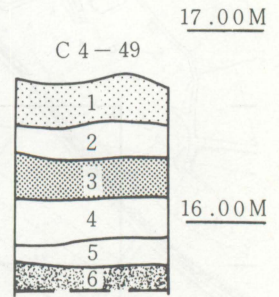
III. 検出遺構

1. 層序

本遺跡は養老川に開折された沖積平野の微高地に立置する。調査地の現地表面の標高は15.8mから16.8mを測る。

調査地の基本的な層位はC4-49グリッドの北側トレンチの南壁を代表例とした。(第4図)

第1層 耕作土、第2層 暗褐色の砂質土層で硬くしまる。第3層 黒色土層で、かなり硬質な土層である。第4層 褐色砂層で軟質である。第5層 灰褐色粘土ブロックを少量含む赤褐色砂層。第6層 白色粘土を基調とするが、赤褐色粘土ブロックを少量含む層。



第4図 標準土層

以上が本遺跡における標準土層である。遺物は第1層から第3層にかけて出土したが、その大半は第3層からの出土であり、今回検出した遺構の掘り込み面も、この第3層黒色土層中にあると考えられるが、その段階での確認では困難を極めたために、各遺構の確認は第4層上面で行なった。

2. 遺構

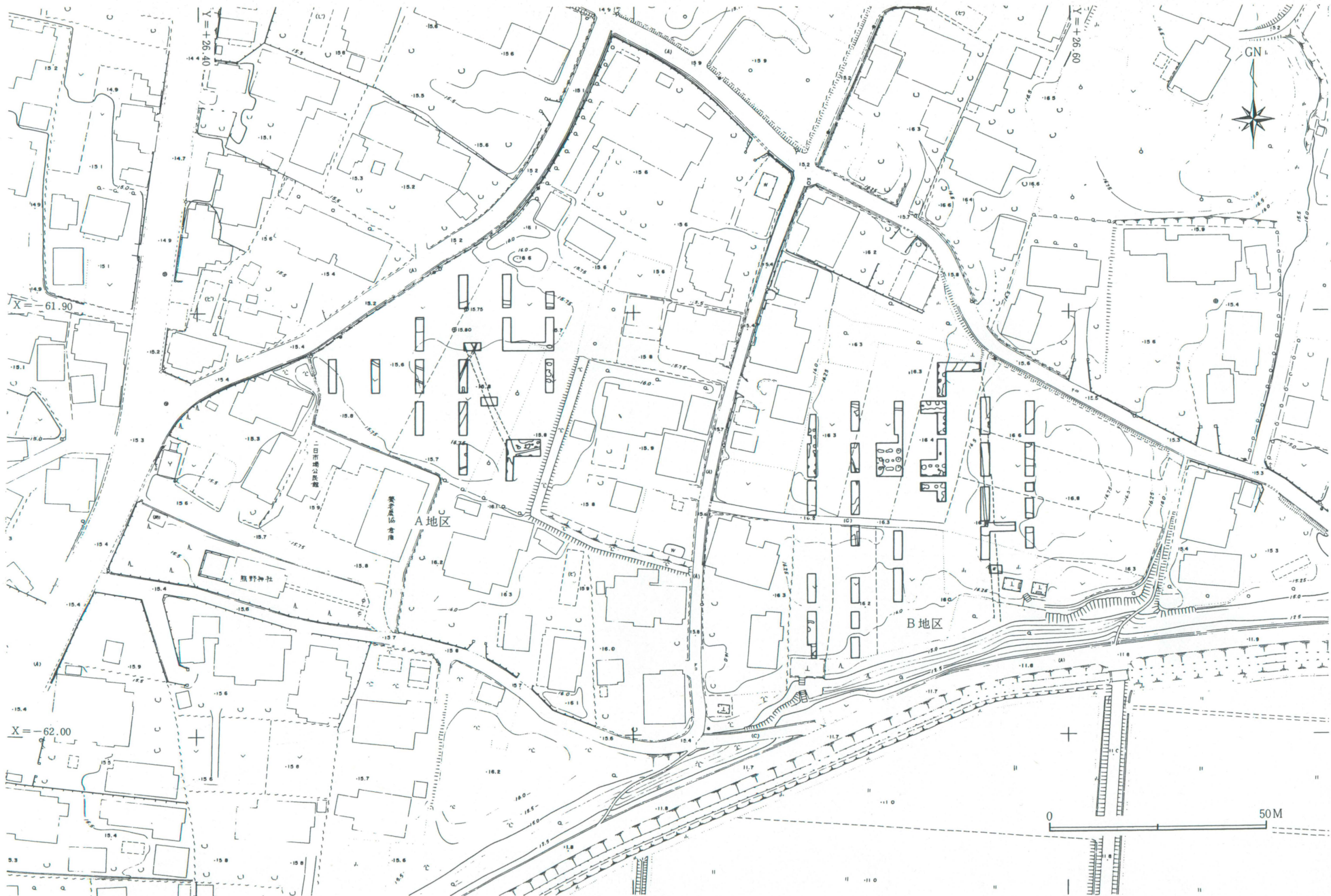
検出した遺構は掘立柱建物跡、溝、土壇などであるが、トレンチによる発掘のために遺構の全容を明らかにし得なかった。そのため調査時には遺構番号を付さなかったが、今回の報告においては便宜上遺構番号を仮称したもの(仮称した遺構番号は図中に記入)と検出したグリッド名称を利用したものがある。

A地区(第6図)

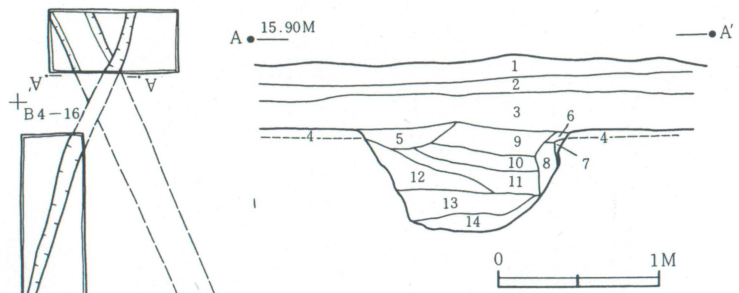
B4グリッドを中心としたこの地区では近年まで水田耕作が行われており、そのための土地改良工事の痕跡などが数ヶ所において認められた。

溝状遺構

少なくとも5条以上の溝状遺構を検出したが、その性格を確認し得たものはない。B4-06からB4-37にかけて検出した001溝は、その主軸方向が真北に対して西へ21°偏位する。巾約1.3m、確認面からの深さ約75cmを測り、断面U字形を呈する。土層断面を見ると(第7図)この溝に対して北東から南西に走る細い溝に切られる。この両者の溝覆土中からは瓦が出土し

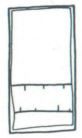
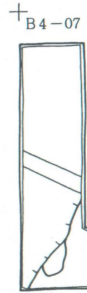
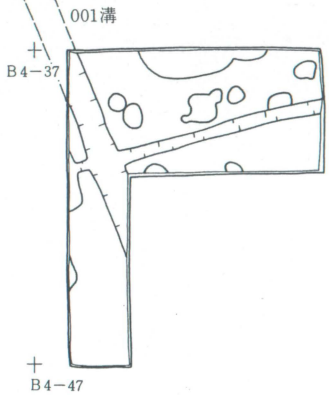
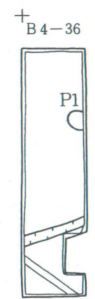
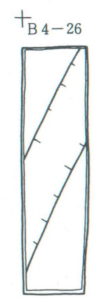


第5図 トレンチ配置図 (1/1,000)



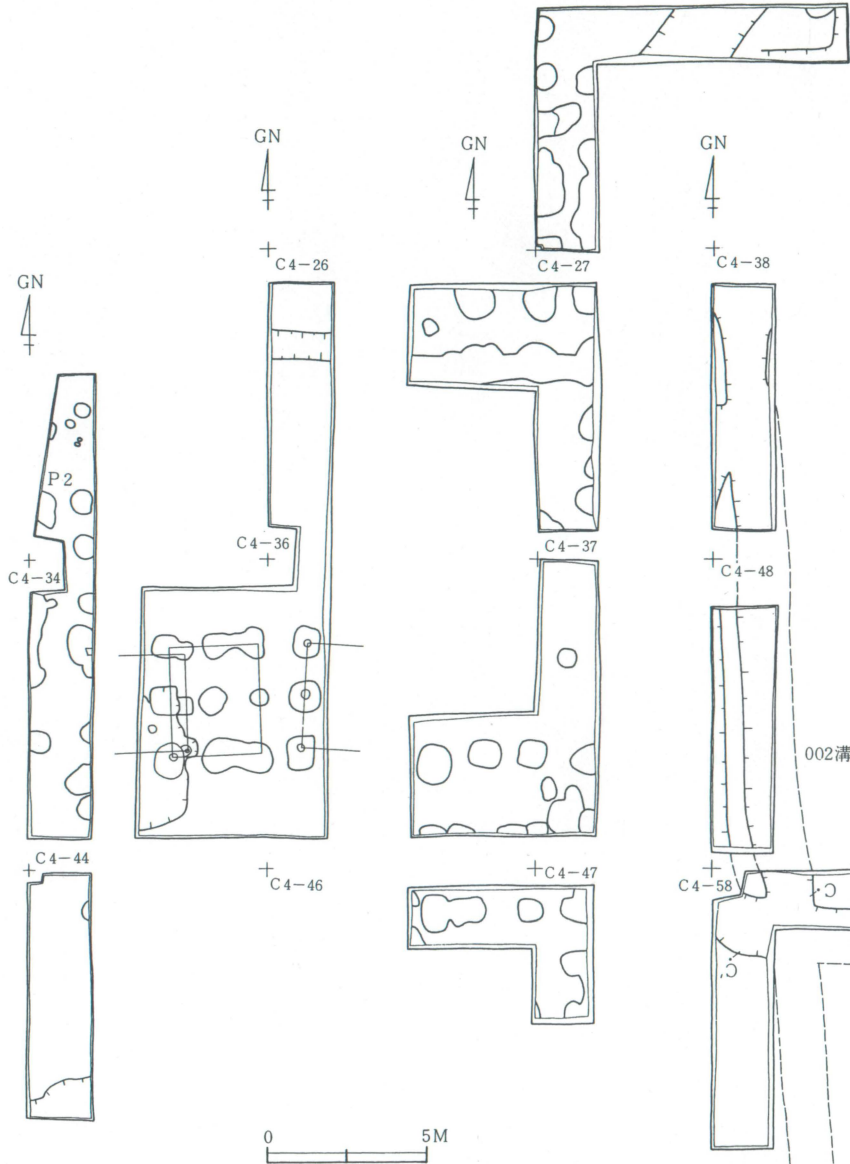
1. 黄褐色砂層
- 2.3.4. 標準土層2・3・4層と同じ
5. 黒色土層(硬)
6. 褐色土層
7. 黒色土層
8. 灰褐色粘土層
9. 明褐色土層
10. 黒色土層(粘土ブロック混入)
11. 黒色土層(粘土ブロック多く混入)
12. 黒色土層(粘土ブロック混入)
13. 黒色土層(粘土ブロック多く混入)
14. 黒色土層

第7図 溝A-A'セクション (1/40)

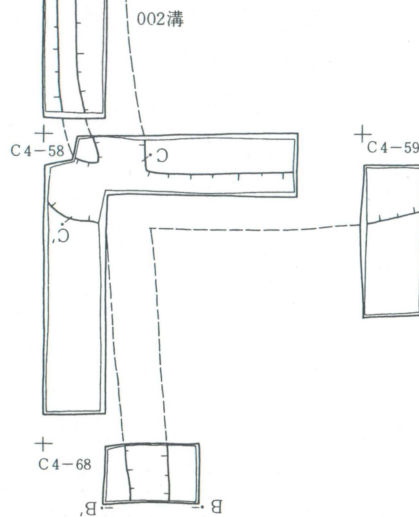
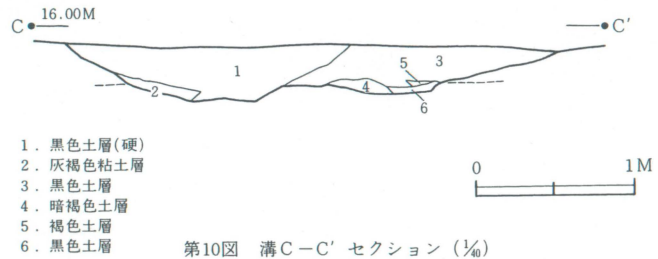
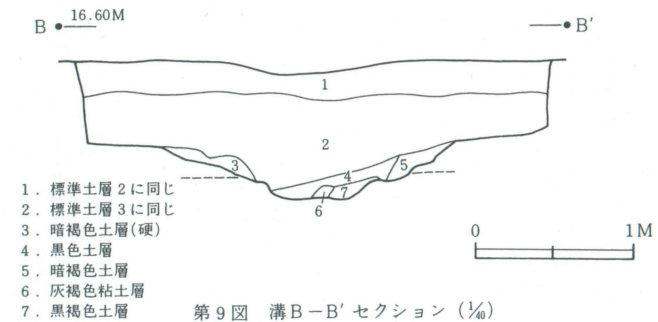


第6図 A地区検出遺構平面図 (1/200)





第8図 B地区検出遺構平面図 (1/200)



ている。001溝を境として、その西側の地域では瓦などの遺物の出土量はかなり少なかった。

掘立柱建物跡

B4-08・18で検出した掘立柱建物跡は、掘り方1.0×1.3mを測る隅丸長方形を呈するものである。南北で4間(8.4m)を測る。どの方向に棟が延びるかは判然としませんが、おそらく検出部分が西の側柱と考えられ、これより東へのびるのではないかと考えられる。また柱痕も不明である。掘り方覆土は、黒色土の中にブロック状の粘土の混入が認められた。

B4-37で検出したピット群も掘立柱建物跡になると考えられるが、柱掘り方は径60cm前後と小さくなり、その並びも整然とせず、柱穴間の組み合わせは不明である。

この他に単独で検出されるピットがいくつかあるが、その中でB4-36で検出したP1(図版3-2)では、瓦が意識的に集中された状態で出土した。このピットを確認したトレンチでは他にも瓦が集中して出土した箇所が2ヶ所あったが、遺構確認面である第4層上面まで掘り下げてピットなどの遺構は確認できなかった。おそらく3層黒色土層中で遺構の掘り込みが止まるためと考えられる。このことから、これらのピットは掘立柱建物の柱穴と考えられ、瓦は柱の周囲を囲めるために使用したと思われる。なお、このような状態で出土する瓦には形式的な偏りはなかった。また同様な状況のもとで掘立柱建物跡を検出する例はB地区でも認められた。

B地区(第8図)

A地区に比して各遺構の遺存状況は良好であり、耕作による攪乱はほとんど見られなかった。

溝状遺構

検出した溝状遺構は4条以上あると思われるが、A地区同様その性格を把握したものはない。C4-38からC4-68にかけて検出した南北に走る002溝は真北に対して西へ4.5°偏位している。巾約1.8m、確認面からの深さ約30~40cmを測る。断面形態は浅い皿状(第9図)となり、A地区001溝とは形態が大きく異なる。溝の掘り込みは第3層中にあると考えられ、溝の覆土となる層からはきわめて多量の瓦と少量の土器が出土した。またこの溝はC4-58で見られるように東西に走る溝を切っており(第10図)、切られた溝には瓦などの遺物は全く出土しなかった。この切られた溝は方形に回り、古墳の周溝になる可能性がある。

なおB地区においては、この002溝を境にして東側では遺物の出土は全くと言っていいほど認められなかった。

掘立柱建物跡

掘立柱建物跡と考えられる柱穴は多数検出されたが、全容を判明したものはない。その中で最も良好に検出できたのはC4-35・36で検出したもので、ここでは少なくとも3棟の掘立柱建物跡を確認した。この部分では、東側に柱例を検出したものが柱掘り方、柱痕など最も良好

な状況であった。南北に2間分(1.6m等間)を検出した。柱掘り方は0.8×1.1m前後の隅丸長方形を呈し、すべてに径約25cmの柱痕が認められる。柱はさらに東側へのびると考えられる。この掘立柱建物跡のすぐ西では桁行2間(3.5m)、梁間2間(2.8m)の南北棟建物跡を検出した。総柱となり、柱掘り方の大きさにはばらつきがあり、その形態にも規格性は認められない。掘り方覆土中より瓦の小破片が出土している。この建物の西の柱穴列は、さらに西へのびる建物の柱掘り方を切っている。この切られた建物跡は南北に2間(3.1m)、東西に2間以上となる建物跡である。柱掘り方は一辺50cm前後で小形になる。いずれも柱痕は認められない。

この他にB4-17・24・27・34・36・37・45・47の部分で数多くの掘立柱建物跡と考えられる柱穴列を検出したが、いずれも柱痕は認められず、柱穴間の切り合い関係も多く、どのような建物の配置となるかは不明である。このように数多く検出した柱穴列ではA地区でも認められたように、瓦が集中する直下で遺構を検出することが多かった。C4-24で検出したP2(図版3-3)では単弁8葉蓮花文軒丸瓦の他に多様の瓦が集中しており、出土する瓦に形式的な偏りは認められなかった。

土 壌

性格不明の土壌もいくつか検出されたが、この中でC4-35で検出した土壌は長辺4mを測るものである。この土壌の西側部分を調査していないので、平面形態は不明であるが、検出された部分から推定すれば、隅丸長方形を呈すると思われる。この土壌は前述した掘立柱建物跡の柱穴に切られている。覆土中からは鬼高期の高杯脚破片が出土している。

以上が今回の調査により検出した主な遺構であるが、当初に予想された基壇などの寺院跡に直接関係する遺構は検出できなかった。それに反して、掘立柱建物跡は群をなして検出されたが、これらがどのように時期的に位置付けされ、どのような性格を有する建物群となるかは、今後の課題である。また溝状遺構の中でも特に001溝と002溝に関して言えば、これらの溝を境として瓦の出土が極端に減るという事実があり、さらに究明されるべき問題と考えられる。

IV 出土遺物

1. 出土遺物の分類方針

出土遺物の大半は瓦類であるが、その他に少量の土器、鉄釘、鉄滓がある。しかしながら、遺跡の性格上遺物の分類の対象は瓦を中心に行った。

近年における瓦の研究成果は『丹波周山窯址』^{註(1)}や『多摩ニュータウン遺跡No.513遺跡I』⁽²⁾に見られるように、出土瓦全体に注目し、なかでも従来の軒先瓦中心の研究から、平瓦、丸瓦中心の研究に進展してきている。このような状況の中で、当遺跡出土瓦の分類、分析を行う際には、全ての瓦について観察を試み、分類を行った。しかしながら時間的制約のために緻密な観察を実行し得なかった点が残念であった。

2. 瓦の分類

出土瓦総数3,210点を数えるが、その種類は軒丸瓦、軒平瓦、丸瓦、平瓦、道具瓦である。これらを次のように分類した。

(1)軒丸瓦—A・B・C類

(2)軒平瓦—重弧文A・B・C類、唐草文A・B類

(3)丸瓦—行基式、玉縁式A・B類

(4)平瓦—格子系A・B・C・D類、縄目系A・B・C類、その他のX・Y類

(5)道具瓦

以下、この分類に従い記述を行う。

(1) **軒丸瓦** 表採資料も含めて総数34点を数える。瓦当文様によって3分類される。(第1表)

A類 (第11図1～4、図版4-1～4)

いわゆる紀寺式の瓦で、雷文縁複弁8葉蓮花文の軒丸瓦である。直径約19.3cm、中房径6.3cm前後を測る。蓮子は1+5+9に配される。蓮弁は比較的扁平で、弁端の反転はほとんどない。間弁はくさび状となる。外区には雷文を配し、その外縁は2重圈線となる。胎土は砂粒を多く含み、少量の石英・長石も混入し、全体に粗い。焼成は堅緻なもの、甘いものの両者がある。厚さによっても2種に分けられ、薄いものは2.5cm前後、厚いものは約3.5cmを測る。また裏面に巾1.8cm、高さ1.5cmの凸帯を巡らすものが1例だけ存在する。

B類 (第11図5・6、図版5-1・2)

単弁8葉蓮花文の軒丸瓦である。瓦当文様構成から言えば山田寺式の範疇でとらえられるが房総における単弁8葉蓮花文の系列から言えば龍角寺式として把握すべきものである。直径約

第1表 軒丸計測値表

分類	整理番号	直			内				区				外			区			胎	土	色調	焼成	出土グリッド	備考				
		径	中房径	蓮子数	弁区径	弁幅	弁数	蓮花文	外区幅	内		外		区		縁	縁	文様							高	文様	文様	形態
										幅	文様	幅	高	幅	高													
A	1	(19.3)	6.2	1+(5+9)	12.8	3.5	F8	複1	2.8	1.6	雷文	1.2	1.3	2重圈	傾斜	灰色	良	C4-58	第11図-1									
	2	(19.2)	6.8	1+5+9	13.5	3.6	F8	複1	2.9	1.6	雷文	1.3	1.1	2重圈	傾斜	淡赤褐色	甘	B4-37	2									
	3	—	6.3	1+5+9	13.4	3.5	F8	複1	—	—	—	—	—	—	—	淡黄褐色	やや甘	B4-37	3									
	4	(18.8)	6.6	(1+5+9)	13.6	3.5	F8	複1	2.7	1.6	雷文	1.1	1.0	—	傾斜	黒灰色	良	C4-58	4									
	5	—	—	—	—	—	(F8)	複1	3.0	1.4	雷文	1.6	1.3	2重圈	傾斜	乳橙色	良	C4-48										
	6	—	—	—	—	3.5	(F8)	複1	2.8	1.8	雷文	1.0	1.4	2重圈	傾斜	灰色	やや甘	B4-37										
	7	—	—	—	—	—	(F8)	複1	2.9	1.7	雷文	1.2	1.3	2重圈	傾斜	灰褐色	やや甘	B4-37										
	8	—	—	—	—	—	—	—	3.0	1.6	雷文	1.4	1.1	2重圈	傾斜	灰色	良	C4-58										
	9	—	—	—	—	—	—	—	2.7	1.3	雷文	1.4	1.1	2重圈	傾斜	淡黄褐色	甘	B4-37										
	10	—	—	—	—	—	—	—	3.7	1.8	雷文	1.9	1.5	2重圈	傾斜	黒灰色	良	C4-58										
	11	—	—	—	—	—	—	—	3.1	1.4	雷文	1.7	1.5	2重圈	傾斜	乳橙色	甘	C4-38										
	12	—	—	—	—	—	—	—	2.6	1.4	雷文	1.2	1.3	2重圈	傾斜	淡黄褐色	甘	B4-37										
	13	—	—	—	—	3.3	(F8)	複1	2.7	1.4	雷文	1.3	1.3	2重圈	傾斜	淡黄褐色	やや甘	C4-58										
	14	—	—	—	—	—	—	—	2.9	1.6	雷文	1.3	1.1	2重圈	傾斜	淡黄褐色	甘	B4-37										
	15	—	—	—	—	—	—	—	2.7	1.4	雷文	1.3	1.4	2重圈	傾斜	暗赤褐色	良	C4-64										
	16	—	—	—	—	3.4	(F8)	複1	2.4	1.5	雷文	0.9	1.2	素圈	傾斜	灰色	やや甘	B4-37										
	17	—	—	—	—	—	—	—	2.9	1.6	雷文	1.3	—	2重圈	傾斜	淡黄褐色	甘	B4-07										
	18	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	淡黄褐色	甘	B4-37										
	19	—	—	—	—	—	(F8)	(複1)	—	—	—	—	—	—	—	淡黄褐色	甘	B4-37										
	20	—	—	(1+5+9)	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	淡黄褐色	良	B4-37										
	21	—	—	—	—	—	(F8)	(複1)	—	—	—	—	—	—	—	淡黄褐色	甘	C4-38										
	22	—	—	—	—	—	(F8)	(複1)	—	—	—	—	—	—	—	灰色	甘	C4-48										
	23	—	—	—	—	—	—	—	2.6	1.5	雷文	1.1	1.0	2重圈	傾斜	灰色	良	C4-58										
	24	—	—	—	—	—	(F8)	(複1)	3.4	1.4	雷文	2.0	1.4	3重圈	直立	淡黄褐色	甘	表採										
B	1	(17.8)	4.1	1+8	14.4	2.7	T8	単子1	1.9	—	—	1.85	1.3	3重圈	直立	黒灰色	やや甘	C4-24	第11図-5									
	2	(17.8)	4.2	1+8	14.4	2.7	T8	単子1	1.85	—	—	—	—	3重圈	直立	灰白色	良	C4-58	6									
	3	(18.0)	—	—	—	2.6	(T8)	単子1	1.8	—	—	—	—	3重圈	直立	灰色	甘	C4-58										
	4	—	—	—	—	2.7	(T8)	単子1	1.9	—	—	—	—	3重圈	直立	灰色	良	C4-58										
	5	—	—	—	—	2.7	—	単子1	1.8	—	—	—	—	3重圈	直立	灰白色	良	B4-37										
	6	—	—	—	—	2.7	—	単子1	1.7	—	—	—	—	3重圈	直立	灰白色	良	B4-15										
	7	—	—	—	—	—	—	—	1.7	—	—	—	—	3重圈	直立	灰色	良	B4-16										
	8	—	—	—	—	—	—	—	2.0	—	—	—	—	3重圈	直立	灰白色	良	B4-37										
	9	(17.8)	—	—	—	—	—	—	1.7	—	—	—	—	3重圈	直立	灰白色	甘	C4-74										
C	1	(14.8)	—	—	—	2.4	(T12)	単1	2.3	—	—	2.3	0.4	3重圈	平坦	黒灰色	良	B4-36	第11図-7									

() 推定 F複弁 T単弁

17.8cm, 中房径4.1cmを測り, A類よりもやや小形化する。蓮子は1+8に配し, 中心蓮子はやや大きくなる。蓮弁の弁端は反転するが鋭さに欠ける。子葉は中房から細長く伸び, 明瞭におかれる。間弁はくさび状になる。外区は3重圏線となり, 高さは約1.3cmを測る。胎土は砂粒と少量の長石・石英を含むがA類よりも精選されたものである。焼成も総じて堅緻であり, 還元焰焼成になる。

C類 (第11図7, 図版5-3)

1点だけの出土であり, その破片も小さく, 文様構成全体を知ることはできないが, 須田勉氏の復元で得た単弁12葉蓮花文の軒丸瓦⁽³⁾と考えられる。範の彫りは全体に浅く, 文様は鋭さに欠ける。蓮弁は界線で画される。子葉, 間弁の表現はない。胎土は砂粒, 長石, 石英, 白色針状物を含む粗いものである。焼成は堅緻であり, 黒灰色を呈する。

(2) 軒平瓦 出土総数28点。重弧文系と唐草文系の2種に分けられるが, 施文手法や文様形態により5類に分類した。

重弧文A類 (第12図1・2, 図版5-4)

ヘラ切りによる重弧文軒平瓦である。弧線は鋭く仕上り, 谷部の断面はV字状となる。段顎式となり凸部には平瓦格子系C類に施される小さな格子叩きの痕跡が残る。胎土は砂粒, 長石・石英を多く含み粗いが, 焼成は堅緻である。出土数4点。

重弧文B類 (第12図3, 図版5-5)

ロクロ挽きによる重弧文軒平瓦である。弧線部の断面形態は丸味を帯びカマボコ状となる。段顎式で凸部には重弧文A類と同様の小さな格子叩きの痕跡が残る。胎土には違いは認められないが, 焼成が総じて甘くなる。出土数5点。

重弧文C類 (第12図4, 図版6-1)

ロクロ挽きによる重弧文軒平瓦であるが, 重弧文B類と異なり, 弧線の谷部と山部の間隔が中広くなり, 弧線の挽き方も浅くなる。段顎式となり, 平瓦部は格子系B類の叩きが施されている。胎土には砂粒, 長石, 石英を含むが密であり, 焼成も堅緻である。出土数2点

唐草文A類 (第12図5, 図版6-2)

小さな破片が多く全体の文様構成を知ることはできないが, 中心の結節において文様が対称に反転することから均整忍冬唐草文になると考えられる。段顎式となるが, 顎部の接合面で欠失するものが多く, その凸部には接合の際の刻み目が認められる。胎土は砂粒を含むが比較的精選されている。還元焰焼成になるものが多い。出土数16点

唐草文B類 (第12図6)

範への粘土のつめ込みが弱く文様の切れはにぶいが, 唐草文A類と似た文様構成をなすと考

えられる。しかし主葉の流れが直線的な表現となり、全体に固い感じを与える。顎部が接合面で欠失し、凸部に接合の刻み目が残る。胎土は砂粒を多く含み唐草文A類に比してやや粗くなる。焼成はやや甘く灰白色を呈する。出土数1点。

(3) **丸瓦** 出土総数680点を数える。いわゆる行基式丸瓦と玉縁を有する丸瓦とに分けられるが玉縁部の製作手法により細分できるため、3類に分類した。

行基式(第13図1・2)

出土した丸瓦のほとんどはこの形態の丸瓦である。凸面は全面へら削りやナデ調整を施す。凸面の一部に叩き目が残るものがあるが、その大半は平瓦格子系C類に認められるものと同様の小さな格子叩きである。凹面には布目がそのまま残る。厚手のものと薄い作りのものがあるが後者は焼成堅緻である。胎土は両者ともに砂粒を多く含み、長石、石英を少量含むものもある。

玉縁A類(第14図1・2)

玉縁部と丸瓦部を一体の粘土で製作するものである。凸面は縦方向のへら削りを施し、凹面には布目をそのまま残す。厚手と薄手の2種があり、前者は胎土に砂粒を多く含み、後者はより精選された胎土となる。焼成は両者ともにやや甘く還元焰焼成になるものは少ない。

玉縁B類(第14図3・4, 図版8—2)

A類と製作手法が異なり、玉縁部を先に木型にあて、その外側に丸瓦部をかぶせて巻きつけるものである。胎土は砂粒のほか少量の長石、石英を含むが比較的緻密である。焼成にはばらつきがある。

(4) **平瓦** 量的に最も多く2,461点を数える。叩き板の違いと製作手法の差により分類を行い、格子系3類、縄目系3類、その他に2類の8分類にされる。

格子系A類(第15図1・2, 図版6—3)

凸面に格子叩きを施すもので、格子目は1.2×1.6cm前後を測り、比較的大きな長方形となる。その断面形は台形を呈する。側面は凸部から鋭角に削られる。凹面は布目と模骨痕をほとんど消すように縦方向のへら削り調整を施す。粘土板を巻きつけて接合した痕跡を残すものもあり、桶巻き作りによると思われる。胎土は砂粒を含むが緻密である。焼成も総じて良好である。

格子系B類(第15図3・4, 図版6—4)

凸面に1辺8mm程の方形の格子叩きを施す。叩き板の条線の彫りこみは格子系A類と異なり何度も彫りこんだようになり、きずが多くつく。格子系A類に比してやや薄い作りとなる。側面は凸部から鋭角に削り調整を行なう。凹面はA類同様に縦方向にへら削りを施すものと、模

骨痕や布目をそのまま残すものがある。胎土は砂粒のほか少量の長石や石英を含むが比較的密であり、還元焰焼成となり堅緻である。

格子系C類（第16図1・2，図版7—1）

凸面の格子目がさらに細くなるもので、一辺4×6mm前後を測り、条線の中が2mm程度の細いものと、一辺6×7mm程の格子で条線の間隔がやや巾広くなるものがある。ともにその叩き目は浅く、特に前者の大半は叩きを施した後にヘラ削りやナデ調整を行うために無文となる部分が多くなる。側面は凹凸両面に対してほぼ直角となる。凹面には布目や模骨痕をそのまま残し、ヘラ削りは施されない。粘土板を巻きつけて接合した痕跡を残すものもある。桶巻き作りによると思われる。胎土には砂粒を多く含み、少量の長石や石英も混入する。焼成は甘く、酸化焰焼成となるものが多い。

格子系D類（第16図3・4）

凸面に不整形の格子目を有するもので、出土量はきわめて少ない。格子の間隔の密なもの疎のものがあるが両者ともに叩き目は浅い。全体に薄い作りとなる。胎土は砂粒を多く含み長石、石英も混入する。焼成にもばらつきがあるが総じて甘くなる。

縄目系A類（第17図1，図版7—2）

凸面の縄目叩きが側縁に平行するもので、縄目系平瓦の中では量的に最も多い。凹面には布目をそのまま残すが、端部の内側に布端の痕跡を残すものもある。模骨痕も認められず、一枚作りによると思われる。側面は凹凸両面に対して直角に削られる。胎土には砂粒、長石、石英を多く含み粗いが、焼成は良好である。

縄目系B類（第17図2・3）

凸面の縄目叩きが側縁に対して斜行するもので、縄原体の太さにより2種に分かれる。縄原体の中が3mm程度のものは凹面の布目を残し、端部の内側に布端を残すものもある。側面はほぼ直角になり、縄目系A類との違いはほとんどない。胎土は砂粒、長石、石英を多く含み、還元焰焼成となるが、やや甘い焼きとなる。また、量的には少ないが、縄原体がきわめて細いものは凹面の布目を縦方向のヘラ削りによって、ほとんど消している。側面も凸部から鋭角に削られ、格子系A・B類のような側面形態をなしている。胎土は砂粒を多く含み粗いが、焼成は堅緻である。

縄目系C類（第17図4，図版7—3）

凸面の縄目が側縁に対して直行するものと斜行するものが交互になり、「ハ」の字状を呈するものである。凹面の端部内側には布端を残すものもある。側面は凹凸両面に対してほぼ直角となる。胎土は砂粒、長石、石英を多く含み粗い。焼成はやや甘くなる。

X類（第18図1）

凸面の叩きの痕跡が全く認められず、ヘラ削りやナデ調整が施されるものである。この一群の瓦は小さな破片のものが多く、おそらく格子系C類の小さな格子叩きの部分が欠失して、無文となってしまった破片が大半を占めるのではないかと考えられる。ただし図示したものは凸面の調整が特異であり、粗い木口状の工具で横方向に削った後に指頭によってさらに横方向にナデつけたものである。凹面には布目を残す。側面は凹凸両面に対して直角になる。胎土は砂粒を多く含み、少量の長石、石英、白色針状物を含む。色調は暗褐色を呈し、焼成は良好である。

Y類（第18図2・3、図版8—1）

凸面に布目を有するもので、わずかに3例だけの出土である。凸面には巾2～2.5 cmごとに段差が認められ、模骨細板の痕跡かと思われるが断定はしがたい。この段差の部分には巾1 mm程の細長い紐状圧痕が認められるが、これが布目痕の下につくかどうかは判然としないので、梓板の連結痕であるとは言い切ることができない。凹面は横方向のヘラ削りを施す。側面は凹凸両面から鋭角に削りおとされる。胎土は砂粒、長石、石英を多く含み粗いものであり、焼成も甘く、酸化焰焼成となる。

(5) **道具瓦** 隅切りの平瓦、丸瓦のほかに面戸瓦や形態のわからない特殊瓦がある。

隅切平瓦（第18図4・5）

出土数は3点であるが破片が小さく全体の形態がわかるものはない。格子系A・B類の平瓦を利用したものである。

隅切丸瓦（第19図2）

1点だけの出土であり、全体の形態を知るには破片が小さく隅落しの丸瓦になる可能性もある。

面戸瓦（第19図1）

丸瓦の狭端側を弧状に切り込みを入れたものである。

特殊瓦（第18図6・7）

7は平瓦の端部に弧を描くように切り込みを入れたものである。側面など欠失しているため全体の形態は不明であり用途不明であるが、隅木蓋瓦のような使用方法を考えることができるのではないだろうか。8は玉縁を有する平瓦である。類例としては我孫子市日秀西遺跡⁽⁴⁾の一例があげられる。

3. 出土瓦の検討

(1) 整作手法について

今回出土した瓦のなかで、管見の知る限りでは房総において例のない玉縁B類丸瓦について

述べる。この瓦の玉縁部分と丸瓦部分は、前述したように二度手間をかけた製作手法をとる。この手法は、奈良県川原寺創建時の使用瓦や法隆寺若草伽藍創建時の使用瓦などに見られる手法と一致する。法隆寺の丸瓦と平瓦について分析研究された浦林亮次氏によれば、この手法による丸瓦は「我国に造瓦技術の移入された極く当初だけなもの」とされている⁽⁶⁾。しかしながら上野国分僧寺寺域周辺の調査⁽⁷⁾においても、同様な手法による丸瓦が出土している。二日市場出土例も合わせて考えるならば、東国において、この手法による丸瓦製作の年代幅は畿内地方よりも広げて考えざるを得ない。

この他に軒丸瓦A類のなかで裏面に凸帯を有する例や、平瓦Y類に見られる凸面に布目を有する瓦などについても考えなければならないが考察するほどの準備ができなかった。

(2) 丸瓦、平瓦の出土量について

今回出土した丸瓦と平瓦の出土量について、個体数と重量についてまとめたものが第2表である。個体数、重量ともに丸瓦は平瓦の約 $\frac{1}{4}$ であり、多摩ニュータウンNo.513遺跡の例と比較すると、丸瓦の出土割合が低くなっている。

次に丸瓦の分類別比率を見ると(第3表)、9割以上が行基式丸瓦である。行基式丸瓦のうち叩き目を若干残すものが40例存在したが、38例が平瓦格子系C類に施す叩き目と同じものであり、残りの2例は平瓦格子系B類に施している叩き目であった。

平瓦の分類では大きく分けて格子系叩きと縄目系叩き、その他のX・Y類がある。個体数が

第2表 丸瓦、平瓦出土比率

	丸瓦	平瓦	計
個体数	680	2,461	3,141
%	21.6	78.4	100
重量(kg)	84.25	316.47	400.72
%	21.0	79.0	100

第5表 平瓦格子系叩き分類別出土比率

	A類	B類	C類	D類	計
個体数	269	202	254	48	773
%	34.8	26.1	32.9	6.2	100
重量(kg)	61.08	28.04	60.65	9.16	158.93
%	38.4	17.6	38.2	5.8	100

第3表 丸瓦分類別出土比率

	行基式	玉縁A類	玉縁B類	計
個体数	623	30	27	680
%	91.6	4.4	4.0	100
重量(kg)	77.75	3.91	2.59	84.25
%	92.3	4.6	3.1	100

第6表 平瓦縄目系叩き分類別出土比率

	A類	B類	C類	計
個体数	129	57	10	196
%	65.8	29.1	5.1	100

第4表 平瓦分類別出土比率

	格子系	縄目系	X類	Y類	計
個体数	773	235	1,450	3	2,461
%	31.4	9.6	58.9	0.1	100
重量(kg)	158.93	49.39	107.63	0.52	316.47
%	50.2	15.6	34.0	0.2	100

ら言えばX類が6割近くを占めるが、重量を見るとX類は全体の約 $\frac{1}{3}$ で、格子系叩きのものが半数を占める(第4表)。このことはX類の破片が小さいためになる結果であり、X類の大半が叩き系C類の格子部分が欠失したものであることを考えると首肯できる。そこでX類を格子系叩きのものと同類として見れば、9割以上が格子系叩きの平瓦となる。さらに格子系叩きの分類別比率を見ると(第5表)、A類とC類がともに全体の $\frac{1}{3}$ ずつ占めている。しかし前述したようにX類がC類と同類の可能性があることを考えれば、格子系叩きの中ではC類が最も量的に多いと考えられる。また縄目系叩きの平瓦では縄の痕跡が不明瞭なものもあり、235例中196例で出土比率を検討した(第6表)が、縄目叩きではA類が全体の $\frac{2}{3}$ を占め、C類はきわめて少ない。

以上が出土比率から見た結果である。

(3) 出土瓦の対応関係について

今回の調査では軒丸瓦3類、軒平瓦2種5類が出土した。しかし寺院跡と直接かかわる遺構の確認はできず、軒丸瓦と軒平瓦の対応関係を求める根拠は何もない。そのためここで検討する対応関係は丸瓦、平瓦をも含め先に検討した各瓦の出土量などを総合して想定せざるを得ない。

軒丸瓦A類は出土量も多く、この紀寺式の軒丸瓦には重弧文軒平瓦が伴うと考えられる。また龍角寺式の軒丸瓦B類にも重弧文軒平瓦が伴うと考えられる。そうなるならば軒丸瓦C類に唐草文系軒平瓦が対応することになる。しかし出土量から見ても、また胎土や焼成などの観察から言っても無理な関係になると考えられる。

重弧文軒平瓦A・B類には、凸部に残る叩き目の痕跡から平瓦格子系C類が対応すると考えられる。また重弧文C類には平瓦格子系B類が接合しており、確実な関係となる。

唐草文軒平瓦A・B類は量的には多いが平瓦との対応関係を得ることはむずかしい。しかしながら胎土や焼成から見る限りでは平瓦格子系A類と最も近いと考えられる。

そこでこの対応関係を整理して想定すると次のようになる。

軒丸瓦A類	——	軒平瓦重弧文A・B類	——	平瓦格子系C類
軒丸瓦B類	——	軒平瓦重弧文C類	——	平瓦格子系B類
		軒平瓦唐草文A・B類	——	平瓦格子系A類
軒丸瓦C類………	?		………	平瓦縄目系A・B・C類

※——確実な関係

このように見ると軒平瓦唐草文A・B類に対応する軒丸瓦が存在しないことになる。しかし胎土や焼成だけから判断するならば軒丸瓦B類との共通性が最も高い。

軒丸瓦C類と平瓦縄目系A・B・C類はともに出土量が少なく、補修瓦として使用されたと考えられるものである。

以上のような対応関係を想定したが、この組み合わせが妥当なものと考えられるかどうかは今後の課題である。

次にこの対応関係から考えられる実年代であるが、やはり軒丸瓦をもって考えざるを得ない。軒丸瓦A類とC類については須田氏によって詳細な考察が加えられており、前者を7世紀第IV四半期に、後者を8世紀後半から9世紀頃に比定されている⁽⁸⁾。そこで問題となるのが軒丸瓦B類である。下総龍角寺の系譜をひくこの瓦についてはさらに検討しなければならないと考えるが、今回の調査で得た結果から考えれば軒丸瓦A類に後続するものと考えられ、8世紀初頭から8世紀中頃にかけての時期に位置付けることができるのではないだろうか。

(4) その他の遺物 (第19図3～11, 図版8—3～5)

瓦以外の遺物としては少量の土器と鉄釘、鉄滓がある。

第19図3は須恵器の蓋である。口縁径11.1cmを測る。蓋の内面には比較的長いかえりがあり、口縁端部より下方に突出している。天井部は横ナデ後回転ヘラ削りを施す。つまみは宝珠状となり高さ1.8cmを測る。胎土には砂粒を多く含むが焼成は縦緻である。色調は灰色となる。陶邑中村編年で言えばⅢ型式1段階に比定できる⁽⁹⁾。遺存度 $\frac{1}{2}$ 、C4-34グリッド出土。

4は土師器蓋である。口縁部は欠失する。天井部には3ヶ所に径1.5cm程の穿孔がある。つまみは扁平な方形を呈する。胎土には砂粒、スコリア、白色針状物を含む。焼成はやや甘く、淡橙褐色を呈する。B4-37グリッド出土

5は土師器高坏である。ほぼ完形で口径14.3cm、器高10.0cmを測る。坏部はくりが深く、脚部は短くなる。坏部内面は横方向にナデ調整が施され、坏部外面から脚への移行部にかけて縦方向のナデが認められる。胎土は砂粒、スコリア、白色針状物を含む、焼成は良好であり、淡橙褐色を呈する。C4-46グリッド出土

6～8は土師器坏である。C4-38グリッドの黒色土層中から集中した状態で出土した。

6は口径13.1cm、器高3.7cm、底径5.8cmを測る。体部下半には手持ちヘラ削りを施す。底部は回転糸切離しの後、数方向に手持ちヘラ削りを施す。

7は口径12.3cm、器高4.7cm、底径5.2cmを測る。体部下半には巾広く手持ちヘラ削りを施す。底部は全面手持ちヘラ削りを施している。

8は口径12.4cm、器高3.9cm、底径5.9cmを測る。体部下半には手持ちヘラ削りを施す。底部は回転糸切離し後無調整となる。

これらの坏は、いずれも胎土に砂粒とスコリアを含み粗いものである。焼成は良好であり、橙褐色を呈する。

9は頭部を欠失した釘である。現存長13.3cm、巾1.0cm、厚さ1.0cmを測る。C4-37グリッド出土。

10, 11は坳形滓である。10は長径12.7cm, 短径10.0cm, 厚さ4.9cm, 重量705gを測る。11は長径14.1cm, 短径10.9cm, 厚さ4.6cm, 重量695gを測る。この坳形滓では径約9cmを測る円形の鉄滓にさらに鉄滓が附着したようになる。

以上が今回の調査で得たおもな遺物である。土器から言えば瓦の製作された時期と重なる段階のものが欠失しており, また墨書土器も一片もない。しかしながら出土した鉄滓は坳形滓であり, 近辺で小鍛冶が行われた可能性がうかがえる。古代寺院跡では鍛冶工房の存在する例も多く, この坳形滓も二日市場に古代寺院が存在していた可能性を示すものと考えられる。

V. ま と め

二日市場地区における古瓦の出土が報告されたのは, 昭和53年のことであった。

その後, わずか5年後の今日, 千葉県教育委員会による重要遺跡確認調査の一環として発掘調査が計画され, 実施されるに至ったのは, 本遺跡が養老川流域において占める歴史的な位置がきわめて重要であるという認識によるものと思われる。

今回の発掘調査の結果は, 残念なことに発掘区が限定されたこともあって, 古瓦以外に, 寺院跡であることを積極的に裏づける基壇建物跡等の痕跡は確認出来なかった。しかし, 多数の掘立柱建物跡やそれを中心とする数条の溝の検出, さらに隣接して古墳の周溝とおぼしき溝など検出され, 本遺跡が単に古代の寺院跡であるという認識だけではなく, その前後する時代においても養老川流域において重要な位置を占める遺跡であることが確認された。

ここで, 調査の成果を整理し, 本遺跡の理解を深めておきたい。

遺構 検出した遺構は掘立柱建物跡と溝である。いずれも確認調査の性格からすべてにわたり全容が把握できたわけではないが, 本遺跡において検出できた唯一の遺構であるといえるであろう。掘立柱建物跡の中には総柱と認められるものも含め, かなりの棟数になると思われるただし, 各棟の規模や配置などについては不分明な点が多く言及できる要素は少ないが遺物の出土について特定の状況が看取できる。

遺物の出土状況については事実記載において述べているとおり, 瓦が集中する部分は柱掘方に相当するという。換言すれば瓦は柱掘方部分より出土することが確認できている。この出土状況は一部分だけにとどまらず, A・B両地区における掘立柱建物跡通有の状況として認めることができる。したがって, 瓦は掘立柱建物跡に使用したのと考えてよいであろう。上総国分尼寺金堂跡において土壇の版築内に予め礎石が配置される位置に瓦敷の施設を造り, 根固めとしている例が知られているが, 本遺跡の場合, 礎石の配置を予め考えられていたかどうかは別にしても根固としての意味を具備した施設と考えて良いであろう。このことは本跡における掘立柱建物がある程度の重量がある屋根を意識してかかる地業を施したのと考えられる。

一方、溝からも多量の瓦が出土している。A地区においては5条以上の溝を検出しているところであるが、001のように他溝によって切断される例もあり、構築の時間差が窺える。この001を境として西側の地域においては瓦等の出土は皆無に近い状況である。このことはB地区においても同様である。B地区においては4条以上の溝を確認しているが、ほぼ南北に構築された002から多量に出土している。溝は第3層から掘り込んでいるが、概して上層の覆土中から出土している。また、瓦を出土する上方の覆土からは一括して土器が出土しており、消極的にしろ廃棄時の違いが窺える。さらに、002を境として東側の地域においては瓦等の出土は無皆であった。

さて、遺構から出土した瓦は7世紀後半から8世紀後半までの間に比定することが可能であるが、出土状況においては形式的な偏りは認められない。したがって、根固として使用された瓦は掘立柱建物跡の構築に際して他より改修されたものであることを示唆しており、建物跡が8世紀後半以前に遡るものでないということが窺える。溝については少なくとも8世紀後半の段階以降では溝としての機能を喪失しており、溝と掘立柱建物群との関係は認めることができない。その中で、C4-35・36において検出した総柱の建物は根固の瓦がなく、他の瓦を伴う建物より構築時期が古く遡る可能性があり、場合によっては002と機能していたことも考えられる唯一の例であろう。また、C4-35・36の地点において瓦の出土が稀少であることから瓦が改修されて使用される以前に比定できよう。

以上の点を総合すると、二日市場において初現となる建物は出土した瓦によって7世紀後半から8世紀前半頃に構築されたと考えられる。この時期の建物跡を確認していないので規模等については明らかでない点が危惧されるが、B地区における溝002は古墳時代後期の古墳(周溝)を切断し構築していることから傍証できるところであり、溝による区画内に瓦葺建物が造営されている可能性が考えられる。瓦葺建物はC4-35・36において検出した総柱の建物を伴い、瓦根固施設を有する掘立柱建物が構築されるまで存続していたと推定できる。また、その終焉については瓦根固施設に使用された瓦の内8世紀後半を示す瓦が補修瓦の性格を有するところから9世紀代に至っての事を考えられる。

遺物 今回の調査で出土した遺物を見る限り、この二日市場に古代寺院が存在したことを積極的に示し得る資料は瓦以外にない。

この瓦の分類を行った結果から、紀寺式の軒丸瓦A類とそれに伴う一群の瓦を創建期のものとして考え7世紀終末に位置付けた。房総においてこの紀寺式の軒丸瓦を出土する例として成東町真行寺廃寺跡出土例があるが、二日市場出土例を比較すると外区内縁の雷文の表現方法と蓮弁との位置関係、さらに蓮弁と雷文の付される面の角度は酷似している⁽¹⁰⁾。このことから両者が同範となる可能性は高いが外区外縁が二重圏と素縁との違いがあり、これは、二日市場使用の

瓦範型を真行寺廃寺跡において外区外縁部に手を加えて使用したものと考えられ、年代的に二日市場例のものが古くなるのではないかと考えられる。

これに後続すると考えられる龍角寺式の軒丸瓦B類は今回の調査で初めてその存在を知り得たものであり、龍角寺式軒丸瓦を出土する他の古代寺院跡との関連や、これに伴う軒平瓦の形式についても今後究明されなければならない問題となった。また出土量の最も少ない軒丸瓦C類と平瓦縄目糸叩きのものは補修用として使用されたものと考え、瓦を使用した寺院跡は9世紀代においては廃絶したのではないかと考えられる。

この他の埴形滓の出土は周辺で小鍛冶が行なわれていたことを示し、寺院跡と製鉄関連遺構のかかわりについても考える必要がある。また天井部に穿孔を有する土師器蓋形土器の類例としては真行寺廃寺跡⁽¹⁾、市原市萩ノ原遺跡⁽²⁾、下総国分遺跡第1地点等⁽³⁾での出土例があり、いずれも直接的に寺院跡と関連する遺構からの出土ではないが、周辺に寺院跡が存在する点で興味深い遺物である。

年代を知り得る資料としては鬼高期の土師器高環や須恵器蓋があり、B地区002溝と切り合う溝が方墳の周溝となる可能性もあり、寺院建立以前のこの地の性格と年代を物語る数少ない遺物である。さらにC4-38で一括出土した環は10世紀後半代の時期⁽⁴⁾を考えることができ、今回の調査で得られる年代の下限を示す資料である。

以上の出土遺物から見て、寺院跡が存在した蓋然性は高いと考えられ、9世紀以降に掘立柱建物群が出現し10世紀後半にはこれらも廃絶した状態になったのではないかと考えられる。

最後に、本遺跡は二日市場集落の真只中に所在しているため、わずかに残る畑地を借用し調査を行ったものであった。このため、最も調査の必要を感じた中央部は宅地のため調査出来ず不十分な成果になったことは否めない。今後の調査によって究明されなければならない問題を多く残したが、これ以上宅地化が進行しないことを願うとともに、適切な対策が講ぜられることを期待したい。

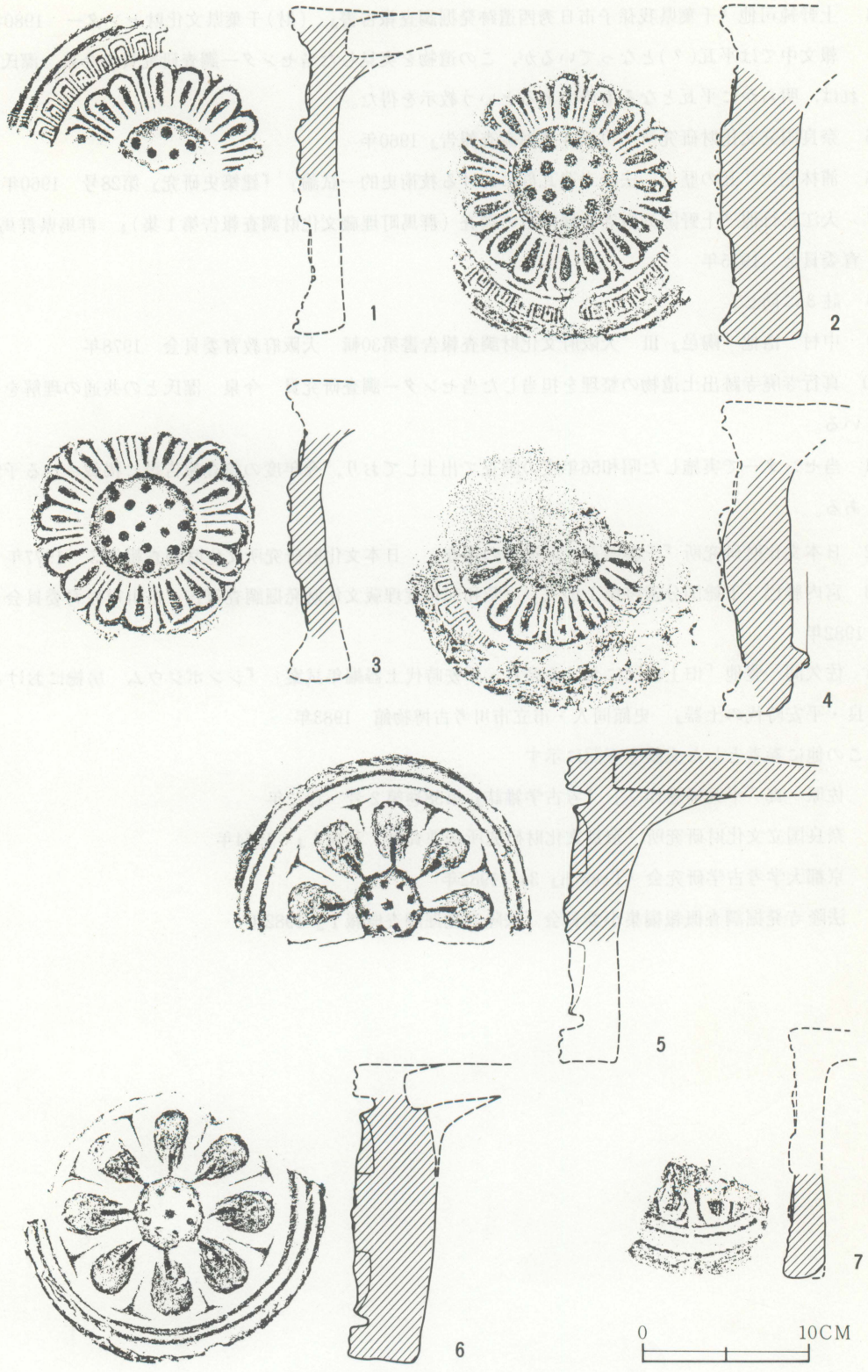
なお、終りにあたって調査に御協力いただいた二日市場地区の次の方々には記して心から感謝します。

板倉いそ・伊藤きく・神谷志津江・小泉さく・小泉とよ・野田ひさ・前里くに・前里美知子
御園生てる・吉野みつ・吉野光子

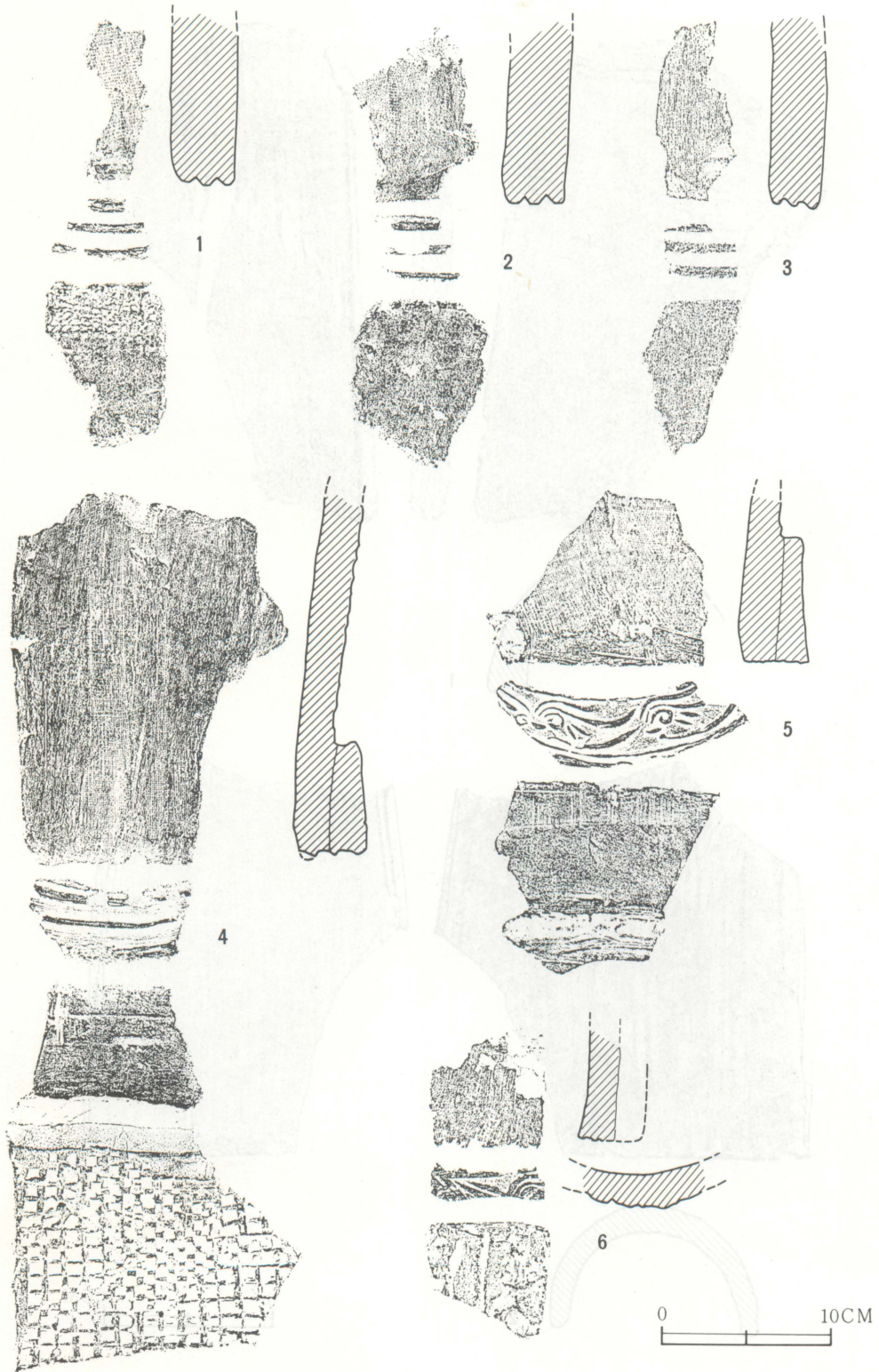
註

- 1 宇野隆夫他『丹波周山窯址』 京都大学文学部考古学研究室 1982年
- 2 加藤 修他『多摩ニュータウン遺跡 -No513遺跡I-』 (財)東京都埋蔵文化財センター 1982年
- 3 須田 勉「房総の古瓦に関する覚書(1)」『古代』64号 1978年

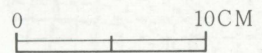
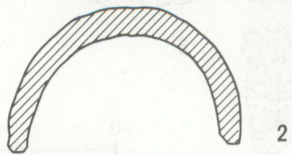
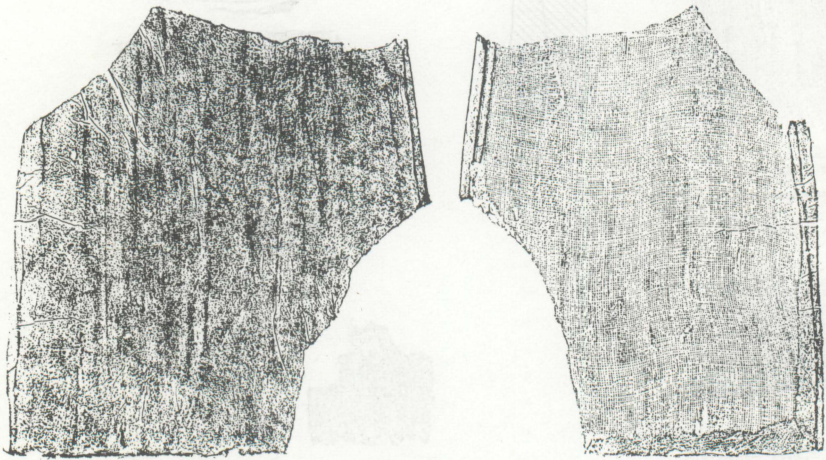
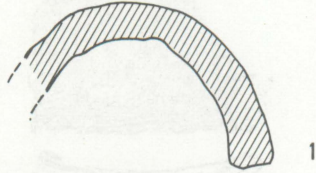
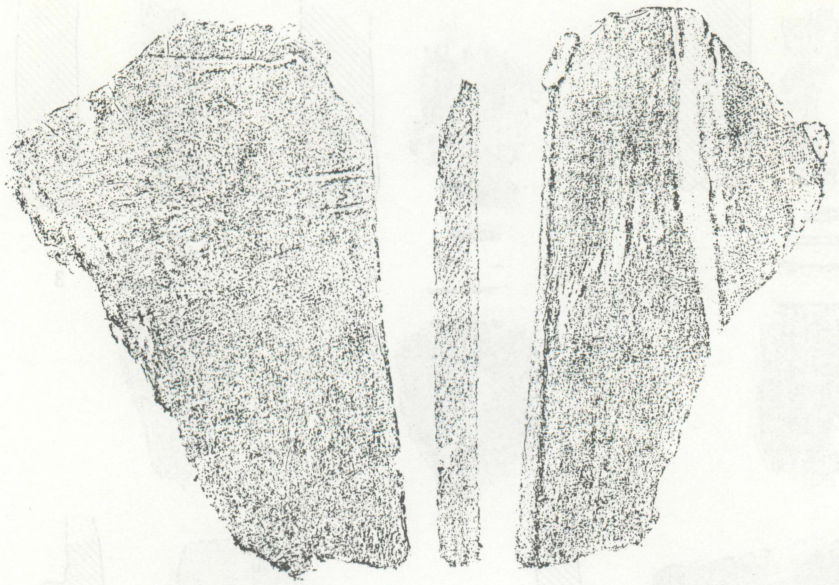
- 4 上野純司他『千葉県我孫子市日秀西遺跡発掘調査報告書』（財）千葉県文化財センター 1980年
報文中では平瓦(?)となっているが、この遺物を実見した当センター調査研究員の今泉 潔氏によれば、明らかに平瓦となるものであるという教示を得た。
 - 5 奈良国立文化財研究所『川原寺発掘調査報告』1960年
 - 6 浦林亮次「瓦の歴史 法隆寺遺瓦群における技術史の一試論」『建築史研究』第28号 1960年
 - 7 大江正行他『上野国分僧寺寺域縁辺の調査（群馬町埋蔵文化財調査報告第1集）』群馬県群馬町教育委員会 1975年
 - 8 註3に同じ。
 - 9 中村 浩他『陶邑』Ⅲ 大阪府文化財調査報告書第30輯 大阪府教育委員会 1978年
 - 10 真行寺廃寺跡出土遺物の整理を担当した当センター調査研究員 今泉 潔氏との共通の理解を得ている。
 - 11 当センターで実施した昭和56年度の調査で出土しており、今年度の調査報告書に掲載される予定である。
 - 12 日本文化財研究所『千葉県萩ノ原遺跡の調査』日本文化財研究所文化財調査報告5 1977年
 - 13 宮内勝己「下総国分遺跡第1地点」『昭和56年度埋蔵文化財発掘調査報告』市川市教育委員会 1982年
 - 14 佐久間 豊他「旧上総国における奈良・平安時代土器編年試案」『シンポジウム 房総における奈良・平安時代の土器』史館同人・市立市川考古博物館 1983年
- この他に参考とした文献を下記に示す
- 佐原 真「平瓦桶巻作り」『考古学雑誌』第58巻第2号 1972年
- 奈良国立文化財研究所『奈良文化財研究所基準資料 瓦編1』1974年
- 京都大学考古学研究会『Trench』34 1982年
- 法隆寺発掘調査概報編集小委員会『法隆寺発掘調査概報Ⅰ』1982年



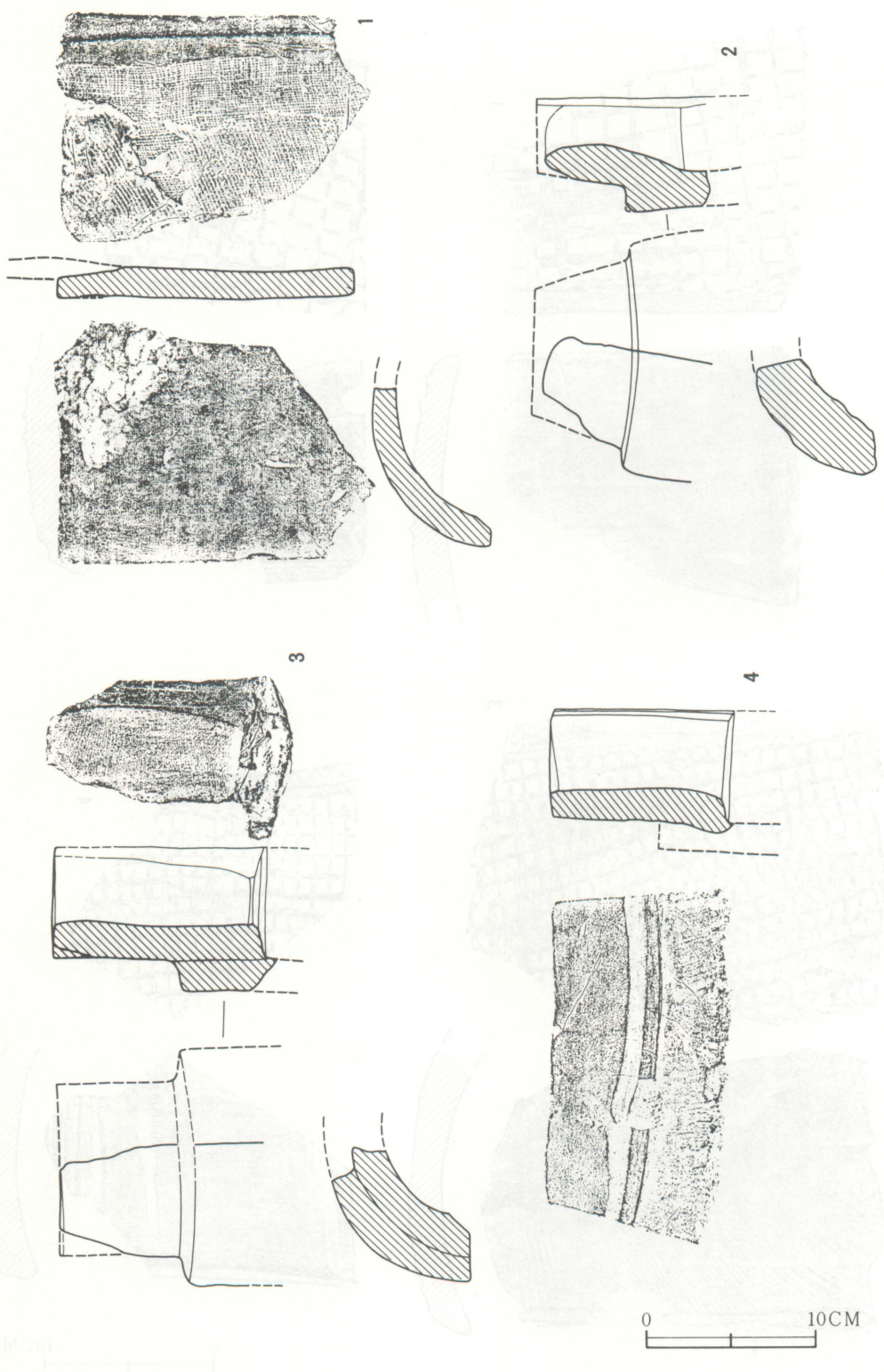
第11図 軒丸瓦A類(1~4)・B類(5・6)・C類(7) (1/4)



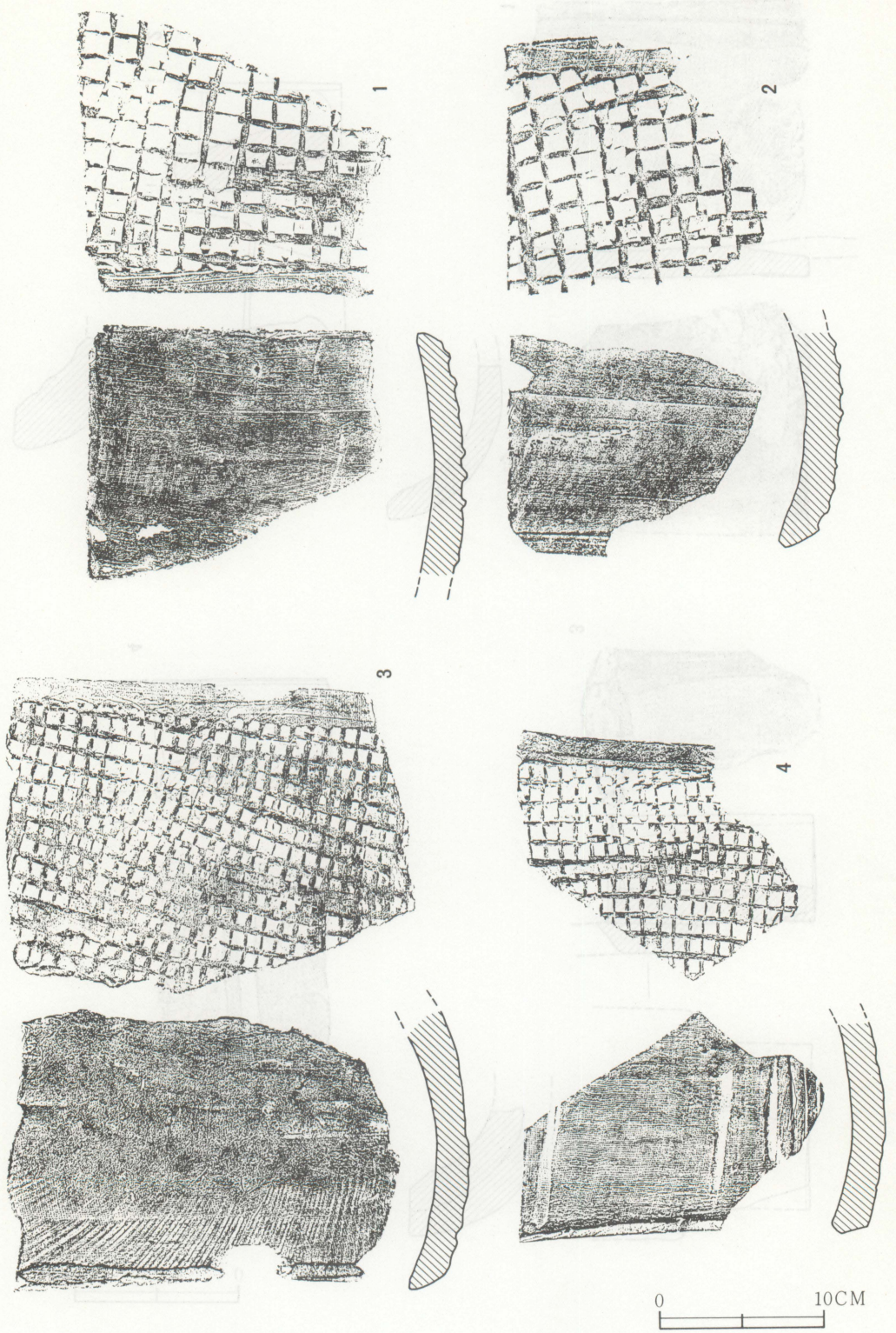
第12図 軒平瓦重弧文A類(1·2)・B類(3)・C類(4) 唐草文A類(5)・B類(6) (1/4)



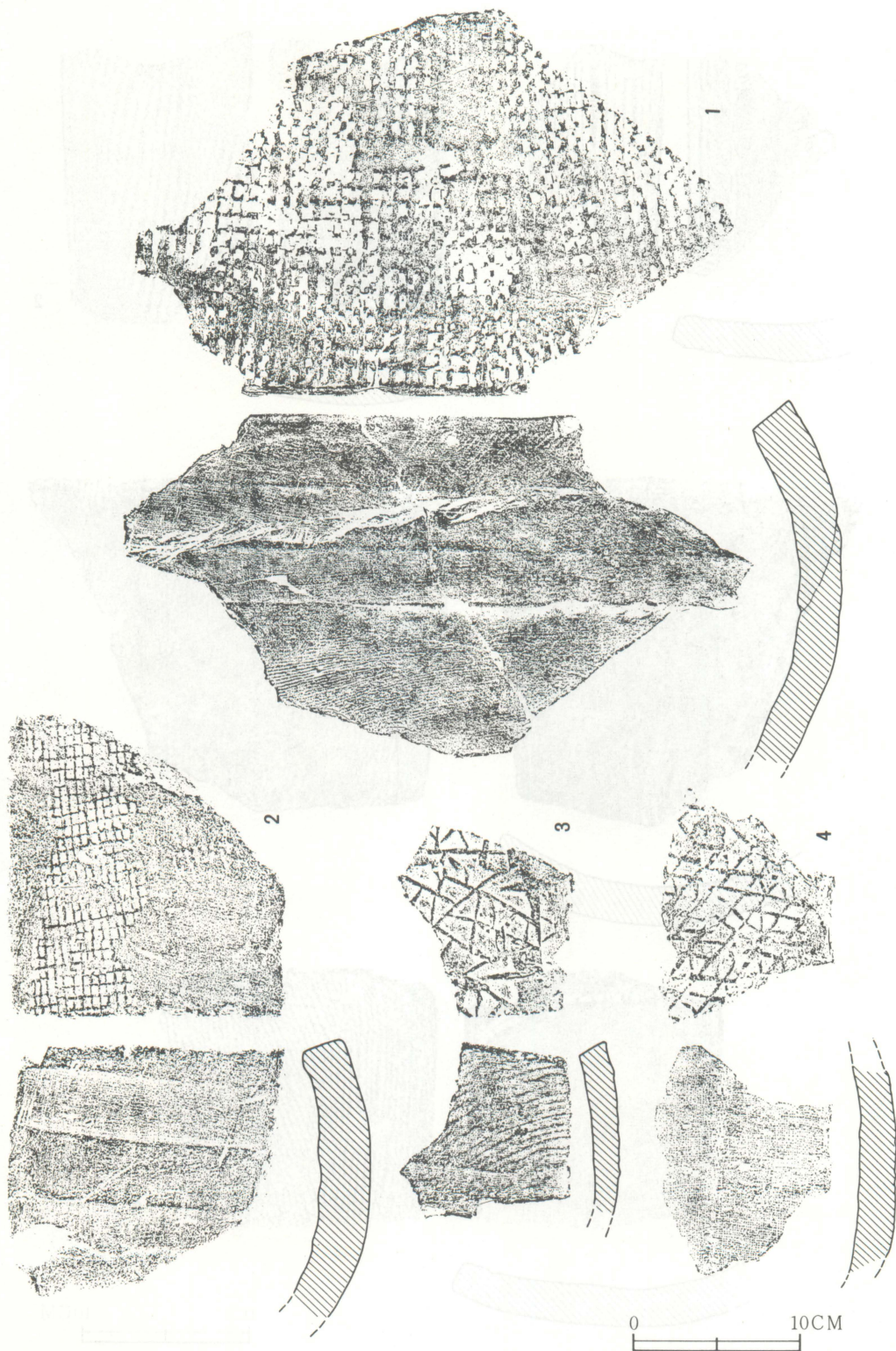
第13图 行基式丸瓦(1·2) (1/4)



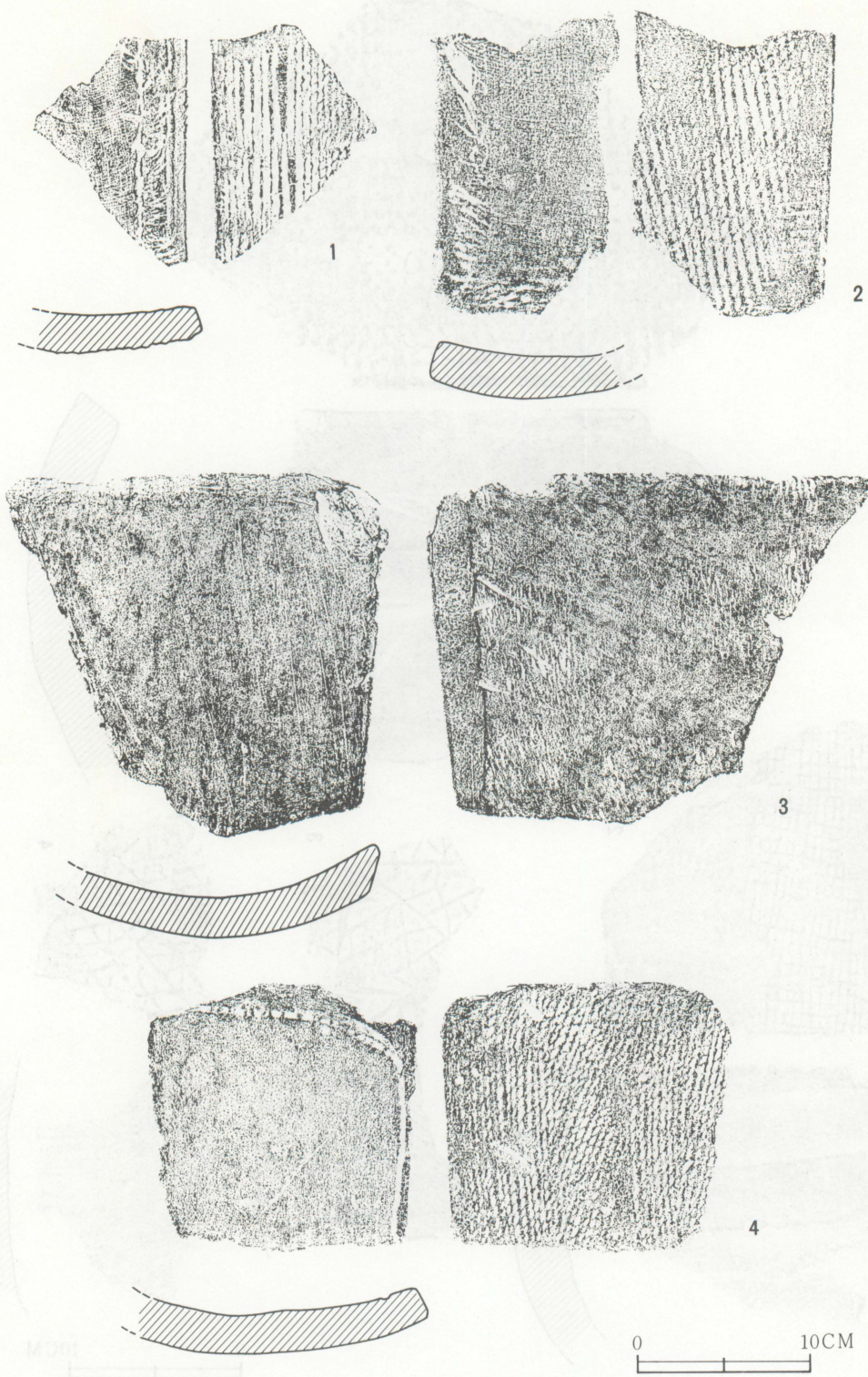
第14図 玉縁A類丸瓦(1・2), 玉縁B類丸瓦(3・4) (1/4)



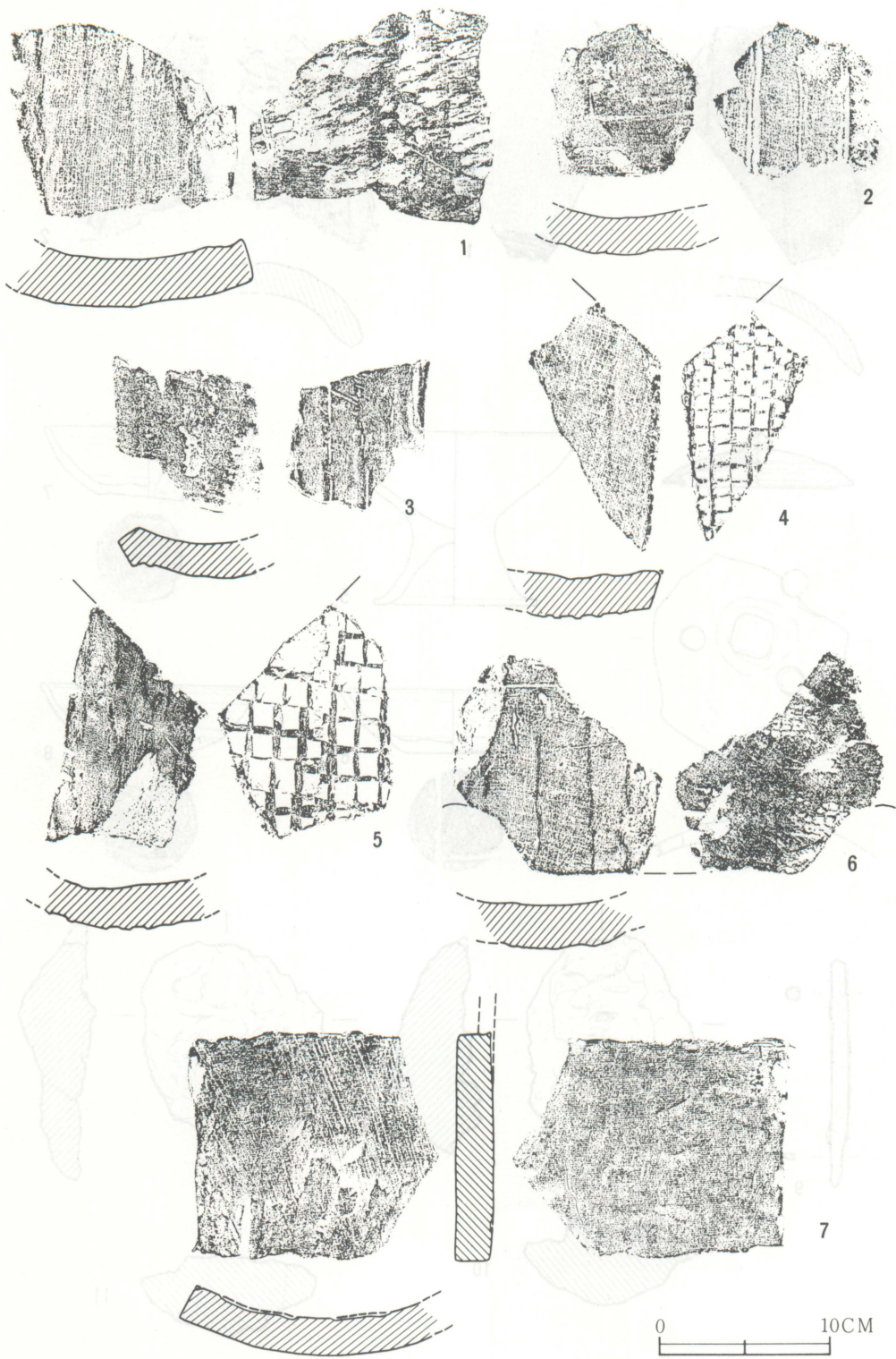
第15図 平瓦格子系A類(1・2), B類(3・4) (1/4)



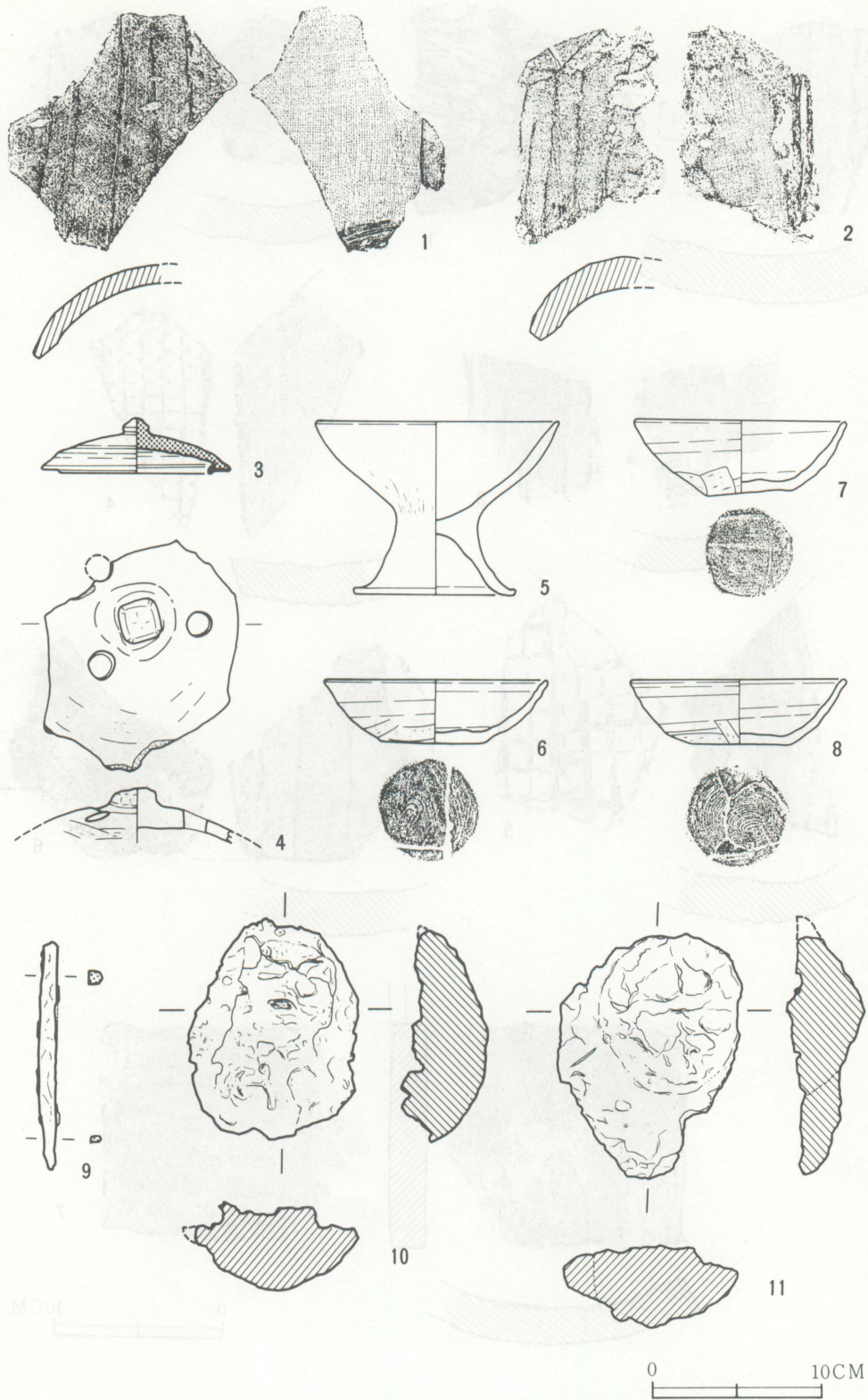
第16図 平瓦格子系C類(1・2), D類(3.4) (1/4)



第17図 平互繩目系A類(1), B類(2・3), C類(4) (1/4)



第18図 平瓦X類(1), Y類(2・3), 道具瓦(4~7) (1/4)



第19図 道具瓦(1・2)・土器(3~8)・鉄釘(9)・鉄滓(10・11) (1/4)

圖 版



空から見た二日市場

1. 遠景(南より)



2. 発掘風景(南東より)



3. 発掘区(南より)



1. C4-35, 36 検出
掘立柱建物跡



2. B4-36, P1 瓦出土状況



3. C4-24, P2 瓦出土状況

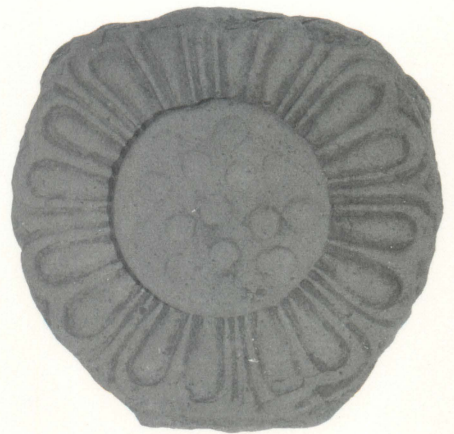




1



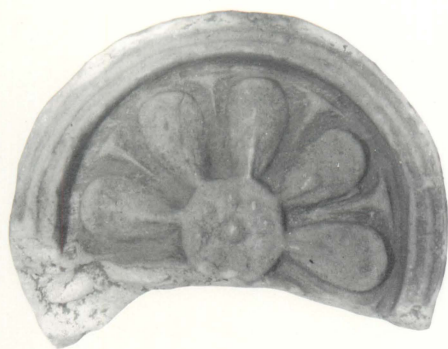
2



3

4

1・2・3・4 軒丸瓦A類



1



2



3



4



5

1·2. 軒丸瓦B類 3. 軒丸瓦C類 4. 軒平瓦重弧文A類 5. 軒平瓦重弧文B類



1



2



3



4



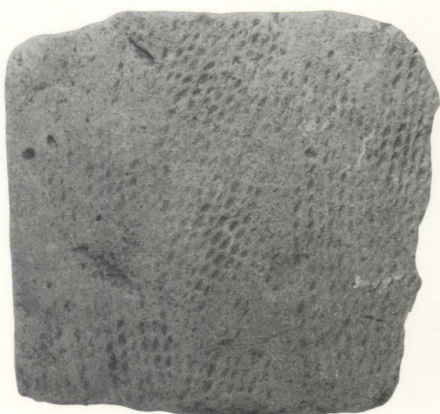
1. 軒平瓦重弧文C類 2. 軒平瓦唐草文A類 3. 平瓦格子系A類 4. 平瓦格子系B類



1



2



3

1.平瓦格子系C類 2.平瓦繩目系A類 3.平瓦繩目系C類



1



2



3



4



5

1.平瓦Y類 2.玉縁B類丸瓦 3.高坏 4・5.坏

市原市二日市場廃寺跡確認調査報告

昭和59年3月31日発行

発行者 財団法人 千葉県文化財センター
千葉県亥鼻1丁目3番13号

印刷者 有限会社 正文社
千葉県都町2丁目5番5号
